360°

フォトジャーナリスト
宇田 有三

続・値段交渉

二〇〇四年の夏、中米グアテマラで「トゥクトゥク」を見かけた。タイで走り回っているのとほぼ同じ形の小型三輪タクシーだ。あの「トゥクトゥク」が、地球の反対側でも走っている。それには驚いた。しかも地元では、スペイン語ではなくタイ語で「トゥクトゥク」と呼んでいた。在グアテマラ十五年の友人によると、「トゥクトゥク」を見かけるようになったのはこの二、三年。おそらくタイを訪れた欧米人が持ち込んだのではないか、と。

料金は、例えば観光地のアンティグア市内だと一〇Q（ケッツアル＝約百二十円）。タクシー代の五分の一。値段交渉をする必要もない。「トゥクトゥク」は観光地を代表する乗り物なのだと、妙に納得した。

グアテマラを訪れる観光客―その多くは北米や欧州から―は、伝統的なマヤ民族の鮮やかな民族衣装を目当てにやって来る。このインディヘナとも呼ばれる先住民族は、グアテマラの人口の約六割を占める。

もっとも一言で「マヤ」と言っても、その使用言語は二十四もあり、彼らを単純にひとくくりにすることはできない。首都を歩いていると、民族衣装を身にまとったマヤの人を見かける。ただし、そのほとんどは女性で、男性の民族衣装姿は地方に行かないと目にすることはない。男たちは、欧米の侵略者の的になってきたからだ。

気軽にエキゾチックさが味わえ、かつ物価の安い国だから海外旅行にはもってこい。だが、この国には、五百年以上前にスペインから侵略されて以来、いまだに負の歴史が続いている。約二十万人の犠牲者を出した内戦が終わったのは九六年の十二月のこと。

カメラに向かって、笑顔いっぱいのインディヘナの女の子（グアテマラ、2004年6月）

メキシコ国境が近いウエウエテナンゴ県を訪れた九四年春、市場で野菜売りのインディヘナのおばさんと話をした。

「この国も戦争が終わりですね。それで、今一番つらいことって何ですか」

「市場でね、値切られるのがつらいんですよ」

貧乏旅行とはいえ、私は彼女たちの何十倍のお金を持って移動している。取材費を切りつめるとはいえ、言い値を値切る癖も付いている。

また、観光客は自らの娯楽のために値段交渉にのぞむ。別に買わなくってもいい、その場のゲームを楽しむこともある。インディヘナの女性たちは、一Qのために、今も観光客を相手にする。